西洋易知録

五

特31
674
12
帝國圖書館藏
室
六冊

六化本

内閣文庫
東京帝國大學圖書之印

西洋易知録卷之四上

河津孫四郎　譯述

第四世紀

第一篇　十字戰の事

紀元千零九十九年西人耶路撒冷（ゼリユサレム）を取る千百八十七年回王（サラヂン）又之を取る千二百二十九年和睦よりて此城又西人の有となる千二百三十九年土耳其（トルコ）人之を取る

和新館藏板

抑亞細亞の一都耶路撒冷を耶蘇教の興るし所ふれば耶蘇教を奉ずる人を此地に行く者多くうし然るに紀元千零七九年回教の王ハッケム其寺院を滅し耶蘇の墓を壊ち遂に土耳其人として耶路撒冷を守らしめ許多の參詣人を悩ませしかるに其後參詣に行きまる者ハ運上を取立てられぞ西教門の人之を怒らざるをふうりくを

茲にアーミンの人にペートルヘルミットといふ者ありて少きころを兵卒ありしが妻の死せるより世を棄てて山に入り此人不圖思ひ立つことのありて耶路撒冷に參詣ふし其有様を見て怒るに堪へぞ直に歐羅巴に歸りて之を羅馬教公ユルバン第二に愬へ諸國の人を勸めて耶路撒冷を攻め取らしめんことを願ひ奉る教公之を許せしかぞペートルを伊太利佛郎西二國を廻りて諸人を説き勸めるに此國百萬の士ふ其言を諾しかり

此時教公も亦諸國の高僧を會して之を議ることこと二度に及ひぬ一度をプラセンチャに於てし再度ハオーベルンに於てせり然るにオーベルンの會に於ていハ教公彼ペートルと共に以前より烈しく耶路撒冷征伐の天理に叶ひたることを説きたりれを之を聽る者皆其言に感し一聲に答へて是ぞ眞神の好ミ給ふ處ぶ

と叫びて此戰爭に向いんとしひし者は赤き十字の印を教公より賜はりし此日教公の說法を聽んとて來りし巨萬の人は此印を受けて歸りたる人いまだ少からざりしとぞ時は紀元千零九十五年なり

○第一の十字戰（紀元千零九十六年より千零九十九年に至る）

始めて耶路撒冷（ゼルサレム）に進發したる兵凡て三十萬人なりしとぞ壯士のみにて婦女童兒病人に至るまで其中に加はりたりペートル（ルルトルの人之を無錢の將と渾名）ルトル（ピルマン）と云ふ人と共に此兵を指揮し日耳曼の路を索めて進みたり然るに行く諸所を亂妨したりぞ匈牙利及びブルガニヤの土人怒りて屢之を襲ひたりれば其兵の剛士但丁（ペタラクイブル即ち剛士但知腦布尓）に到着したるときは僅に打漏らきたる殘兵のみなりし剛士但丁帝（即ちアレキシス之を東帝）ボスポリュス（海峽の名）の邊に陣せしめしに其兵は此地より又ニースに進み土耳其人と戰て大に破られ逃げ歸りたる者は少からざりしとぞ

然し耶路撒冷に進發したる兵唯此の如き者のみに非ぞ整へたる諸國の勇兵此地に向いんとして其用意を爲に然し英王リュヒュス（イギリス）そ各番にして費の多きこと殺好まぞ日耳曼帝顯理佛王費利布（ヘンリー フリップ）を教公と善らざるを以て其勸めに從はざりしとぞ帝王を一も此役に関はりなる者ふし故に其兵そバッスロルライン（ゼルマン）公ゴットブリー（一名）

ボーログ子コットフリーと總大將とふしノルマンヂ公ロベルト。佛王の弟ヒューブロイス公ステーハン。タレンチュム公ボヘモンド等の諸侯之を指揮しそれ其兵凡て五十萬餘ありて諸將を兵を分て諸道より剛士但丁を集りボスホリュスの海峡を渡りて一齊に二ースを攻め寄せ五十日にして之を落しそれ後又其兵ドリーロームといふ處にて大に土耳其帝ソリーマンの兵と合戰を此時の騎兵を十萬餘騎にして或を曲なる劍を廻し或は輕き短槍を操りて味方の長槍に渡り合ひ互ひに勇を奮て戰ひそれを前後例少き大騎戰ありしとぞ土耳其の兵は遂に打破られ爭て逃げ散りしかば味方の兵は益

勇を進んでタウリュスの沙漠を打過ぎアンチオックに至りそれより路程渴して堪へがたきに或人の説に歐羅巴の兵會水に逢ひたるとき之を爭ひ飲みそれぞれに多く飲みて立地に死する者三百人に及びそれとい

ふ

偖歐羅巴の兵をアンチオックに攻め懸るに味方の人皆花々しき勇功を為さんとて互ひに競ひしが一日大將ゴットフリー一刀に敵の騎兵を兩斷せしに半身は河中に落ち半身を未だ馬上に在ふうう走りそれぞ僧ロベルト側に在り直に筆を執りて云く一刀に一個の土耳其人二個の土耳其人とふまりと書き記せしを最と

めぐらしき書様ありてもオロパの兵ハアンチオックを攻むるとゝへども容易く落つべき様をふるはしゝぞ之を遠巻ゝ圍ミそゝり然るに寄手の兵も烏合のことゝあれぞ互ひゝ不和と生ることゝふきゝしも、けゝだ且つ兵粮ゝ乏しく冬の寒氣も烈しゝうゝれぞ覚束ふく也此城を圍ミそゝるが幸ゝして城中の士官の我ゝ内通ゝる者けりて味方と風雨の夜ゝ引き入きしゝぞ此城を取ゝることを得たり敵将ケルボガ之を聞き直ゝ兵を率ひて此城ゝ馳せ来りしが味方の為ゝ散くゝ打破きて逃け去ゝそゝり是ゝ於て欧羅巴の兵を将ボヘモンドを立てアンチオックの城主とふせり

欧羅巴の兵をアンチオックゝ逗留ゝることゝ數箇月ゝ後南の方耶路撒冷をさして出立ゝ時ゝ其勢僅ゝ歩兵二萬騎兵千五百ゝ減しゝり此兵先づアクレといふ砦を取ゝて後進むべきふりとゝへども耶路撒冷ゝ行ゝんと欲ゝる情盛んふりしゝぞアクレの城主と和睦を為して直ゝ耶路撒冷ゝ進ミゝりきて紀元千零九十九年ゝ於て其兵遂ゝ此地ゝ到る騎士咸々馬より下りて素足とゝり城を拜し見て且つゝ悦び且つゝ哀ミ各千行の涙を流しゝり頃しも夏の最中ふれぞ熱さゝ鎧を焼き貫くが如く河流ゝ枯きて一滴の水も、けゝりしがゴットフリー等諸将ゝ少しも臆ゝる氣色ふく凡て三十

五日の間晝夜と分たず苦戦しられぞ遂に耶路撒冷の城を攻め落したり此時諸將そ城中に集まり囲て教の徒凡て七萬人を鏖にし且つ猶太教の徒を焼き殺しけるとぞ假令他教を奉ずる者ありとも降ずる者を殺せしそ勇士に似ずふき所業ありと心ある人そ議りける

偖も歐羅巴の兵そゴットフリーを推して耶路撒冷の王とふしられるゴットフリーそ謙遜して王の號を受ずして自ら神陵君と稱しられゴットフリーの位に即くや埃及王の兵とアスカロンといふ處にて合戦し大に之を破られられり是戦を第一十字戦の尾とられる此時歐羅巴の

將士の國に歸らんと欲する者そそふゴットフリーに別れを告げて去られられり上にいへるペートル ヘルミットそ前に敗北したるにも懲ずして又ゴットフリーに從て来りしが是人も別を告げて其國に歸り「ヒュイ」といふ寺に於て身を終りられるとぞ

ゴットフリーそ耶路撒冷の國法を作り程ふく卒したり

○第二の十字戦紀元千百四十七年より千百四十九年に至る

偖も耶路撒冷の國そ「オスピタルレル」「テンプラル」といへる二部の僧徒興りて之を守りぬ「オスピタルレル」の徒そ皆緋色の外套に銀の十字形を縫ひ付られると着

せり「テンプラル」の徒そもそも九人の勇士の相誓ひて共に身を脩め常に耶蘇教の敵と戦ふんとて同盟せしより日々に社中に加る者益多く遂に強大なる一徒黨となりぬ

第一の十字戦は終まること四十八箇年を耶路撒冷（ゼルユサレム）の國に何事もなかりし然るに紀元千百四十六年頃に要城イデッサ（モエユル公ゼンギの為に攻め取られ）といふ處まで此事歐羅巴（コウロッパ）に聞へ来りぬ故に容易（やすく）事なりぬと雖て歐羅巴諸國また再び十字戦を起さんとぞ騒ぎける

茲に聖僧ベルナルドといふ者ありて此人を紀元千零九十一年ボルゴンディーに於て生れ少きより僧となり後シャンパンのクレールボークスの高僧となりて速に節倹修行の名を顯はし其食せし物を粗薄なる麪包（ぱん）胡桃（くるみ）并に木の葉なりしかば顔色青ざめ身体痩羸（やせよわる）しかりしかども精神を益盛んなりきて此人を耶路撒冷（ゼルユサレム）の危きを聞て只管之を憂ひ紀元千百四十六年ベゼレー山に佛國（フランス）の士民を會して再び十字戦を催（もよ）すべしと説き勸めるに數萬の人一齊に是も真神の好き給ふ所なりと叫び（此事第一十字戦の条にも見る）の印しを賜ふことを欲し其聲天地に響きて止まざりしとぞ

僧ベルナルドを又佛王路易第七日耳曼帝コンラット第三の二人を説きたれども いづれも其言を感じて之を承引き早速軍兵を催促を是を於て二國の王を凡て三十萬人許の兵と合せ日耳曼匈牙利を路を索めて剛士但丁を到り海峡を渡りて亞細亞を進む第一十字戰のとき路程これと同然なれど剛士但丁帝マニュールを日耳曼帝を惡とその援路を斷ちたれぞ日耳曼の兵を容易くカパドシヤ山をおかして土耳其人の為め打破られたり

去程を路易の兵を紀元千百四十八年の冬メーンドル河を渡りて土耳其人と戰ひ少しく利を得たりしかでオヂセーといふ所にて大敗を取りしぞ餘儀なく退てアタリヤを篭らんと欲しかども此城を既を土耳其を従ひ門を閉ぢて其兵を入をざりしぞ其兵を再び憤發してアンチオクを内ひ遂を耶路撒冷を到りぬ此時日耳曼帝も兵を以て到著路易と共を耶路撒冷を入りしを耶路撒冷の人を二國の君を迎へて悦ぶこと彊りふく直を兵を出して其軍を援けダマスキュスを攻めしが利なりざりしぞ二國の兵を軍を止め歐羅巴へ歸りたり是を於て第二の十字戰を花やかなる勝利ふくして終まり是より殆んと四十箇年を過ぎて又十字戰起る

○第三の十字戰紀元千百八十九年より千百九十二年を至る

紀元千百八十七年土耳其帝サラヂン耶路撒冷を攻め取り是より迄八十八箇年の間寺院を建て左り右り金の十字架へ道路を倒さと行人の為に踐を汚ゲさるを由歐羅巴に聞へ渡れる諸國の人大に怒り再び十字戰の用意を為しに成り

其時許多の軍艦伊太利の港より乗り出して亞細亞に到る船中の兵卒こゝに多くあつて上陸し耶路撒冷の人を耶路撒冷の僧徒「オスピタル」「テンプラル」等と云ふ輩こゝに援けてアクレを攻め圍こゝ成り

去程に歐羅巴にて英王リチャルド佛王ヒリップ日耳曼帝フレデリッキバルバロッサ皆軍の用意とあり此時「サラヂン」の稅と名くて諸國の西教を奉ずる者を盡く租稅を取立てゝ軍の入費に備へ諸國寺院にあつて土耳其人を斬殺ある者を一生の罪科消滅して天堂に再生をべきことを説法しゝるとぞ

紀元千百八十九年英佛兩國の王を未だ出兵せざるに日耳曼帝フレデリッキそラチスボンより出立し陸路にてアドリアノープルを押し寄せヘルレスポントの海を渡り小亞細亞を横行して土耳其人を打破りイコニュームを従へ居りそれより シリシヤに進むしが此地に於てフレデリッキ疾に罹りて俄しくそれぞ其兵を一同悲歎に堪へざりしが互ひに諫めてアクレに内ひ寄手の

兵を加へられ
アクレを内ひ奪る人くを皆百數の苦計をふして此城
を攻るといへども容易に落つべき氣色もふく身方數
敗北し死傷箕へ盡きれども歐羅巴より援兵の
到らんこと殆んど絶頼んで皆少しも辟易をることふく之を
圍むこと殆んど二箇年に及びるゞ敵もまゝ日こに
兵を增して固く此城を守るゝ
紀元千百九十年英佛兩國の軍兵船路りて耶路撒冷に
向ふ其兵合て十萬人ありきて兩國の兵を悉西利ふる
メッシナ城に止りて冬を過ごしゝり英王をリチャード
ス島に止まり此島をもめて夫人を迎へ且つ其島の王

イサークを廢しゝり是等の事によりて英王を輩らく
此島に逗留しるれども佛の兵先づアクレに到り程ふく
英の兵も到着せしるぞアクレの寄手を大に勢を得直
にアクレを攻め落しゝり敵の國帝サラヂン此有樣を
見て驚き憂ふといへども性質の美しき人ふれども聊
も怯き行跡を為ざる英佛兩國の王等て熱を病を陣中
に臥る由を聞きサラヂン數梨又を雪を贈りて其病
を訪ひにるるとぞアクレの落しゝりサラヂンを兵を
引て南地へ退きゝり
凡て十字戰の譚に小說めきたる勇談快話多きを以
て人其軍の非ゝるに心を留る者少し夫を十字戰に加

らりたる者多くそ歐羅巴の党黨として神と尊む心を
ふく大概皆名利を得んと欲する徒のそれぞ旗章劍
楯外套等盡く教門の印しを帶びそりといへども其心
敢て教門の旨に從ふにあらざるが故に皆百般の惡業
と行ひ廉耻を知らざる行跡多きも驚くに足らざるこ
とふるべし

アクレの落し後程ふく佛王を歐羅巴に歸ぜくれぞ英
王獨と南の方に兵を進め十一日の間行く合戰しジョッ
パアスカロンの二城を降し遂に耶路撒冷を距ること
二十里の地に至る此時英國に謀反起り且つ兵を減し
同盟の諸侯とそ不和にありしゆえ英王そ國に歸ぜけ

るゆ途中にあるて澳土利公の兵に捕へらき獄中に繫
ごゆきりり時に紀元千百九十二年ありり英王そ獄に在る
こと殆んと二年にして稍く免きぬ（委しくそ英國史畧に見る）
英王耶路撒冷を出立しるるより此十字戰ハ和睦とふ
とぬ其翌年土耳其帝サラヂン（トルコ）俎しるれぞ又耶路撒冷
に戰起るそそ次篇に分解るを見て知るべし

初めアクレを攻るとき義士三四人相誓ひて病ある者
及び疵を患る者を引き受るそ之を救らんと義を結び
しゆ其社中に加るる者多く後一大會社とありにるり
是をチュートニック（ドイツ）會社といふ

第二篇　十字戰の事（前章の續）

○第四の十字戰（紀元千百九十五年より千百九十七年に至る）

前章に云へる澳土利（オーストリヤ）公日耳曼帝とありてヘンリー（ヘンリー）第六と號せ此ヘンリー竊に剛士但丁（コンスタンチノープル）の國を并せんと欲しくれど悉西利（シシリー）を取りて其縁索（ゼノア）と為さんと思へり

きどど白地（ビザンチン）に斯くを言ひ出しぐ兵を以て第四の十字戰を起さんと揮して軍兵を催促を

ヘンリーを兵四萬を分て自らを指揮し悉西利（シシリー）にて

くの秘策を行ふんと謀り其餘の兵を二隊とふして進ましむ一隊を多腦河（ダニエベ）を渡りて剛士但丁の都に入れ此國の船を借りてアクレに赴きくり又一隊を波羅的海（バルチック）の港より出帆してパレスチン（耶路撒冷を即ち是國の都）に向ひしがいまだ此地に到着せず

然るにパレスチンに、ける西教の徒を稍く國の太平を得たるを悅びくく折ふしぞ歐羅巴（ヨウロッパ）の軍兵今又来りて戰爭を始るを見て竊に物憂く思ひしが此時土耳其（トルコ）の方にても兵を起して直にジッパ城を攻め取り益兵を進めて押寄せくれぞパレスチンの人を大に驚き初め歐羅巴の兵を惡しく待ちたるを悔ひ其兵と一致して猶又海路より来る歐羅巴の兵とも待ち受け其兵と合してベリーチュス（今のベイルート）に向ひ直に之を攻取りくり先年の戰爭中に敵の俘とありたる者九千人許

り久しく此城の牢獄に繋がれしが皆是に至りて免るこを得たり

去程に日耳曼帝ヘンリー（ヒルマン）を悉西利（シシリー）と打ち靡け又一隊の兵をパレスチン（トルコ）に送りしかぞパレスチンの人くそ大に勇み此人數に乗じぞ土耳其人を耶路撒冷（ヒルサレム）より追ひ拂うんこと何の難きこと、なうんと悦びあり然るども時候の寒氣に向へるを以て皆く猶疑していまだ其地に進まず海岸の一城トロンに攻め寄せ給りて日耳曼の兵を隧道を穿ちて地下より城壁を振ひ動かしうれぞ今にも城壁を崩るべく見へあるうり此時城兵大に恐れ降服赦罪を乞ひうるに日耳曼の兵之を許さ

ずしうぞ城兵を一同に死を決して防ぎ戦ひうるに仍て戦争の模様大に變し味方少しく負色とあるうる處に敵の援兵近う寄せ給る風聞頻りあるしうぞ味方の隊長を恐れて夜中に逃げ去りうり其翌日城兵を味方の陣中混雑するを見其虚に乗じて散くに攻立てけるぞ味方の兵を取る物も取りあへず狼狽してチリル（ヒルマン）まで敗北しけり

此時日耳曼帝ヘンリー（ヒルマン）殂落せりパレスチンに出張し給る日耳曼の兵之を聞きもそや賞を出そべき人ふきにいうでう軍（サ）と為そべうんやとて皆く國へぞ歸りけるは是に於て第四の十字戦終る

○第五の十字戰（紀元千百九十八年より千二百零四年に至る）

羅馬の教公インノセント第三又十字戰を起さんと諸國に觸れつゝ然れども諸國之に應ずる者少く中にも佛國に教公の責めを蒙りて國中停止せる折ふしなれば一人として其命に應ずる者なし（譯者云く此頃教公の勢盛んにして諸國の王と雖ども之に逆ふ者なきに丕も之を君と妻もうけざるを失と罰ずと占ふ然るに神を拜するこゝとも得ざる此罰を美語にて「エキスコンミュニケーション」の罰といふ教公まづ一國を罰して寺院を鎖さしめ祭を止めしむることゝ之を「インテルディクト」の罰といふこのとき佛國にそこの罰を蒙りたるあり）

茲にマルチ河の邊りにある一小邑の僧にホールクといふ者ありしが佛國士人の大に會せしとき巧量り其場に趣きて辯舌を振ひ十字戰を說き勸めたるに

其理に服し爭て十字戰の兵に加はらんと罵りつゝしこと恰も響の物に應ずるが如くなり

僧も佛國（佛國の人多きを以て）を伊太利國ベニースの君に船を借らんことを賴み且つ諸軍此地に集らんことを定めたれば然し集會の日限までに此地に集まる貴人を甚だ少ふありしを以て船を借るに相當の價を償ふこと能はざるを皆之を憂慮しつゝ初めベニースの屬城ザラ謀反しつゝあれば此ときベニースの君は貴人等に向ひ船賃の代りに此城を攻め取るべしとの賴みに應じて佛人等は一齊にその城に攻め寄せ僅に五日にして之を降しつゝ時に紀元千二百零二

年ふり
茲ニ又剛士但丁城ニそそ帝の弟アレキシュースといふ
者帝イサークと廢して其目をくりぬきそれぞ帝の嫡
子アレキシュースと混して讀とうり故ニ上ニとといふる恐き
て今その名を畧せり難と避うてべニースニ至り佛國の士ニ援
けと求めうり佛國の士或を直ニパレスチンニ赴うん
といひ或を東帝の嫡子ニ援うを與へんといふ者ありて評議區くふりしグ遂ニ援うを與ふることニ決しべ
ニースの船ニ乗て剛士但丁ニ到をうり
偖も佛國の兵を亞細亞の海岸ニ上陸しスクタリ城ニ
屯し直ニ庭の平らふる船許多を用意して各之ニ馬を

載せ皆槍を携へて船上ニ立ちけるそれ水主ニ命して
其船を漕ぎ出さを悉ふく海峡を渡りて剛士但丁の海
岸ニ着きうり此ときべニースの船艦其港の入口を
丈へふる鎖の綱を切り放ちれば佛國の兵一度ニ
剛士但丁城ニ攻め懸るアレキシュース之を防ぐこと十
一日ニ及びうるがもそや防ぎがしをや思ひうん盡く
く城中の金銀を集りて懐ニしいづくへか出奔しうり
時ニ紀元千二百零三年ふり此時の戦ひニそべニース
の君常ニ先登し頗る武勇を顯ハしうるとぞ
偖佛國の士をイサークを帝位ニ復しうるが後ろどぶ
く剛士但丁の土人と佛國の土人と不和出来て再び闘

とある佛國の士遂に勝利を得しがイサークも其嫡子も戰爭の最中に身罷りしゝぞフランドル公バルドウィンと立て東帝と稱せしめ此國の四分一を與へ其餘をベニースと佛の諸侯とそれ領ち取りたり

○少年の十字戰

中古に當りて最も奇とすべき事件の一に少年の十字戰あり

頃を紀元千二百十二年のことなりとヘンドリームの牧童ステーヘンといふ者十字戰を起知んとして十二歳許の童兒を集めありしが佛國の童兒男女とふく其父母の泣き諫むるとも聽き入まじく爭てステーヘンに從ふ

かどにステーヘンの童兵遂に三萬人に及びぬ其兵皆神に詣る服を着し手に蠟燭を持ち口に歌曲を唱へてプロヘンスを打立ち途中にあぐの艱難に出逢ひしが互ひに励まして云く我等が信心とを神も隣まそ給ふべきなれば海の水も自然と乾きて我等の耶路撒冷へ赴くべき路自ら開くへしと童心の愚なるも的ふまことに樂しきに進み行きて遂に地中海の邊に來るに及び慈心深き二人の商人童兒等を見我等が船を以て耶路撒冷へ送り得させんといひをそし聽てこれを七艘の船に乘らしめ然るに海上にありて難風に遇ひ二艘の船破損し此船に乘りたる童兒を盡く溺死

て死そ其餘の五艘ゑ乘きる童兒そ挨及ゑ着し件の商人の為ゑ盡く奴ゑ賣らをゑり然し惡業の天罰忽ち報ひ来りて此商人そ悉西利ゑ於りて誅戮せられしとぞ

○第六の十字戰　紀元千二百二十七年より紀元千二百二十九年ゑ至る

敗北しゑり

其年より千二百二十七年ゑ至りてパレスチンゑ事ふし此歳日耳曼帝フレデリッキ第二羅馬教公グレゴリー第九の勸めゑ從ひパレスチンゑ出帆せしが軍兵の中ゑ不平の者多くうしろそ病と得たりしゆへ或云フレデリッキ不意とゑ

帝そ已むこゝを得ざ纜と解きし日より僅ゑ三日ゑして其船と返して國ゑ歸りゝれば教公そ怒て帝ゑ教罰英ゝて「エキコンミュニケシヨン」と註上ゑ見も と加へゝり千二百二十八年フレデリッキ帝又兵と擧げてパレスチンゑ進發そ此時ゑ及て羅馬教公の怒と尚解けざれば パレスチンの僧徒ゑ布告して フレデリッキと援くへからざると命じゝり然ども帝そ英智の人ゝりゝれば埃及田王マレッキカミルと深く交と遂ゑ和睦と結ひゝるより耶路撒冷ベトレム其餘ジッパより ブトレメースゑ至るまでの諸邑盡くフレデリッキの手ゑ渡まり西教と奉ぜる諸國の人之と聞て悅びまるそ ふしとゝへども僧徒そ皆之

と悦びぎりし

偖もフレデリッキ王「チュートニック」會社の義士と共に耶路撒冷に入り耶路撒冷王の位に即き王しが禮を助くる僧ふとりしと以て自ら冠を為されり時に千二百二十年ありフレデリッキ耶路撒冷に在ること久しうぐりしに羅馬教公歐羅巴にいるフレデリッキの地を侵さんと量りたるぞフレデリッキを急ぎて伊太利に歸せりり

○第七の十字戰

耶路撒冷又回教の徒の為に取られしかば佛王路易第九世と聖路と大軍を起して佛の濱より出帆せられ

と其ころ諸船の人皆教門の詩を唱へて征伐の首途を賀せりころ第七の十字戰ふり

路易をシープリュス島にて冬を過し春を待て又纜を解きダミーターの前に到りて碇泊を海邊にて許多の敵兵陣を布き身方に向ひて射る矢を雨のごとし此とき路易自ら諸士に先ちて劍を振て海中に跳て入り諸士を励まして陸に押し上り敵兵を攻め立てれば敵兵ハ辟易して逃げ去りぬ是においてダミーターを佛の兵に降

路易の軍中に疫病を得て死るもの多くうしかば人數を大に減しあれども路易を恐るること多く兵を進

りてマンソーラに至りしに敵兵不意に突出して路易の陣を討ち路易奮戰して遂に之を破りあれども其弟と始め許多の勇將を討せられぞ今を進むるも勝を制しうるとして其兵を整へてダミータを指して退くれしがミニーと云ふ村に至りしとき敵の伏兵に逢て散々に敗北しぬ此に路易を逃り暇なりしとゝへども其兵を棄て身を逃るに忍びずして一歩も奔ることあらしのぞ遂に敵の虜となりぬ時に紀元千二百五十年なり後路易をダミータを敵に返し且四十万金を與へんことを約し稍く放ちかへしが內ゟ國へと歸らんと四箇年の間アクレに滯留し再び事を擧んと謀らきこの此に母の身羅し由閉へられぞ路易を餘儀なく佛郎西へ歸りぬ

○第八の千字戰紀元千二百七十年より千二百七十二年に至る

そもそも十六年の後佛王路易又兵を擧げて亞布利加に到り兵力を以て チュニス 王を西教に變ぜしめんと謀きり此ときに敵兵とを容易く打破りあれども疫病大に流行して軍中病まげる者少なく佛王も之を病で終に沒しぬ

英國の太子義都華 イドワルド 後に義都華第一 兵を率ひて亞布利加 アフリカ に到着しぬるが路易既に沒しぬる由を聞き即ち其兵を以て耶路撒冷 ビリュサレム に向ふ此とき義都華をヘニシャに進ミナ

ザレッヨろろて回ゝ教の徒と鑿殺しゑり義都華ハアクレヨ陣せしが刺客の為めヨ傷けゑまし〻ば大ヨ勢ひと失ひ英國ヨ歸りゑりその後十字戰を起せしゑのふし（ゼリユサレム）

耶路撒冷回ゝ教の徒ヨ取らまし〻り西教の人そアクレと東方の據り處とふしゑるが紀元千二百九十一年ヨ至りて回王カリルの兵アクレヨ攻め寄せ之を圍むこと三十三日ヨ及び器械を以て遂ヨ其城壁を打ち碎き一齊ヨ攻め入りゑれぞアクレを容易く落城しゑり此ゑ死殺されゑる者と虜ゑふりて奴僕ヨ賣まゑる者と合て凡と六万人僅ヨ之と逃まて船ヨ乘り込ゑる者も大半そ溺まて死しゑるとぞ淺増しゑうし事ゑゝ。

ゑり

西教と奉せし耶路撒冷（ゼリユサレム）王即位の表

王の名	紀元
ボーログ子のゴットフリー	千零九十九年
バルドウィン第一	千百年
バルドウィン第二	千百十八年
アンジョーのホルク	千百三十一年
バルドウィン第三	千百四十四年
アモーリ〻	千百六十二年

バルドウィン第四	千百七十四年	
シビル	未詳	
シビルの子	未詳	
バルドウィン第五	千百八十五年	
ゴイ、ド、リュシナン	千百八十六年	
シャンパンのヘンリー	千百九十二年	
アモーリ、ド、リュシナン	千百九十七年	
ゼアンド、ブリアン	千二百零九年	
日耳曼帝フレデリッキ第二	千二百二十九年	

至紀元千二百三十九年耶路撒冷為回々教徒奪滅

第三篇　アルビゲンス人の事

要　紀元千二百十三年シュレッドと合戦

インノセント第三千百九十八年教公と為り千二百十六年歿す

教公の権勢極りて盛んなりしぞ英王ジョンを其威を恐れて代く羅馬教公の臣僕なることを誓ひ奉り然るに佛郎西の南地なるアルビゲンス人と名つけ奉る一群の人民ありて教公の門に従はざる多れをインノセント之を罰せんと謀る余其事を以て茲に説かん

アルビゲンス人そランゲドック佛國郡名ある葡萄の多き地に住る民にして其使ふ所の言葉をプロヘンス語と用ひ多く其民皆冷例なれぞ僧官の行ひ惡きを見て之を

輕じ〻〻實ニ此項の高僧を位貴き狗黨ニして其僧ニ
役せらるゝ小僧を無學の村漢ありしとぞ其民
を羅馬の教ニ從ひ自ら一派の宗旨を作りて之を
と信じ他宗の人とハ言語も交へざるなどあるを
其宗旨を古の「マンチュー宗」と善惡二神行る記と教る宗旨ニ似るなぞ
西教の旨ニ違へる所ひとりとへども西教の真意ニ適
ひたる所もまた多うるなぞ羅馬教公の説きし西教
ニ比べなぞ却て正しうしとへども之を奉る者い木
像を拜せば華美の僧服を厳と總て飾らざると好を經
を載るニを嚴禁ある机を用て立派ある臺い却て神の意
ニ背くとへり其人皆麁食して身體を練り斷食ふぐも

數之を為しゝとぞ
教公イレノセントを之を惡を其為を好を寵ふが為ニ僧
を贈り遣いしゝ寵其僧の一人トーロース公ライモ
ンドの臣提堤則ち一名ありの為めニ教きわゝり是を
ぞ宗旨軍の基ある時ニ紀元千三百零八年のことあり
き
是時是班牙の僧ドミニック、グズマン。教公の為めニ辯舌
を振て佛人を説きアルビゲンス人を征伐ることを
勸め又諸教裁判所を取建て其黨を誅戮しゝ是を羅
馬背教裁判の始めにして紀元千二百二十三年教公グ
レゴリー第九在位の時ニ至り教公の命令を以て其裁

判所と諸所に設け置くことゝあり伊太利是班牙等の羅馬教に背く者を盡く其所にあつて燒戮せらる第十八紀の末に至りて此刑稍く止む

偖も佛の人を備グズマン等の為めに励まされも我も我もと爭てランゲドックに赤肉ひローン河の谷を下りて地中海の濱の方より此地に攻め入りたり偏鄙の民も之を聞き棒又を鎌を提げて其兵に從へり其兵皆十字の印を胸に着けたり是をアルビゲンス人と以て西教の敵とふして之と戰ふことを回く教の徒と戰ひしもとの如く思ひたりだあり但し回く教の徒を攻しときそ胸に着たる之を肩に着けしとぞ

トーロース侯之を聞て大に恐き直に教公の使僧に歎願して罪を謝しまゝが其甥にライモンドロジルとゝへるを教公に降ることゝふく其兵を二手に分て之をベジール。カルカソン子の二城に置きカルカソン子の城に自ら之を籠まりきてベジールの城兵を城を出て寄手の兵と奮ひ戰ひしゝども寄手を極めて多勢なれぞ容易く之を打靡け勢に乘て遂に此城を落しけり時に紀元千二百零九年なり教公の使僧アルノルドアマルリック諸士に觸まて城兵を敎せよといひしとき諸士問て城兵に曰く羅馬教公の教に背くなる者と實に之に從ハざる者とゝ区別せん如何して之を區別せん

やとゝひしゞアルノルド答て然らそ盡く之を殺まべし神自ら其忠臣と其敵とを區別し給ふべしといひしを驕慢とやいふん慈悲ふしるやいふん嗚呼之を以て羅馬教公の教惡うしと見るに足る此を犯殺しある者六萬人城を焼之と焼き拂ひ

カスカソン子を固く守りて降らざりしゞ水を之しきを以て今を詮方ふるしゞ長九里の地道を掘て城兵皆逃け去りを時を大将ライモンドロジル獨り敵を降りて獄舍を繫ぐこと三月を遂を死せり其領地を教公方の勇将レーセストル戾シモンド、モントホルト盡く之を掠奪しる

紀元千二百十年の夏モントホルト。アルビゲンス方の堅城を子ルと攻む城兵固く守りて七週日を及びるゞ水乏しくあるるれを遂を城を開て降參せり然るにモントホルトを羅馬教公の教えを遵奉せゞ命を免さんと城兵を云ひるくしるゞ城兵を我宗旨を棄て羅馬の邪教を従るんより寧死んを如じるを敢て従ゞを遂を燒うれるく死しるゞ哀きふるゞるこゝもふを

（此とき死せる男女凡て一百四十人）

モントホルトの兵をランゲドックを横行して之を亂妨狼藉をること大方ふるゞとゞモントホルト又ラバロール城を問む

此城をトーロースと距ること十五里ありアルビゲンス人皆逃れて城中に匿れるをモントホルト等をこの城を以て背教賊の巣穴なりと唱へ五千人の兵を以て攻め寄せたり時に紀元千二百十一年なり此城を攻るに當て寄手城墻を打ち碎くべき奇異なる器械（其名をカットと云ふ）を用ひるれども濠深くして墻に達せしむることを得ざれぞこの濠を埋めしめるが城兵地道より出て又土を浚ひるに由て兎角寄手をして其意を得ることを能はざりきモントホルト之を憂ひ火藥を放て城の地道を塞ぎて件の器械を自在に働らしめーるぞ稍くして墻の一部を打ち碎きたり寄手の兵其處より一齊に攻め登り遂に城を落しるり此とき虜となりて燒殺されし者幾百と知らず

トーロース侯ライモンドをモントホルト等の勢ひ益烈しきを見て之を憂ひ稍く心を戦ふるに決しをアラゴン王ペドロと同盟し紀元千二百十三年ミュレットにおいてモントホルトと合戦せりトーロース侯又敗北してペドロを討死しるり是に於てアルビゲンス人を辟易して再び起るに及ぶ皆降参しるるぞモントホルト等兵を引て各其家に歸りるる

紀元千二百十五年佛王（ヒリップ）ヒリップアオギュスチュスの子路易（ロイス）又アルビゲンス人を征伐し六週日の間ランゲドックを

此城をトーロースと距ること十五里なりアルビゲンス人皆逃れて城中に匿れるがゆえにモントホルト等をこの城を以て背教賊の巣穴なりと唱へ五千人の兵を以て攻め寄せたり時に紀元千二百十一年なり此城を攻るに當て寄手を城墻を打ち破くべき奇異なる器械（其名をかツトと）を用ひるれども濠ありて墻に達せしむることを得ざるこの濠を埋めしめるが城兵地道より出て又土を浚ひることを由て兎角寄手を其意を得ることを能はざりきモントホルト之を憂ひ火藥を放て城の地道を塞ぎて件の器械を自在に働らしめーうぞ稍くして墻の一部を打ち破きたり寄手の兵其處より一齊に攻め登り遂に城を落しうり此とき虜ありて燒殺されし者幾百と知らず

さてもドーロース侯ライモンドをモントホルト等の勢ひ益烈しきを見て之を憂ひ稍く心を戰ふるに決してアラゴン王ペドロと同盟し紀元千二百十三年ミュレットにおいてモントホルトと合戰せりトーロース侯又敗北してペドロを討死しうり是に於てアルビゲンス人を辟易して再び起ること及ばず皆降參しうるぞモントホルト等兵を引て各其家に歸りうる

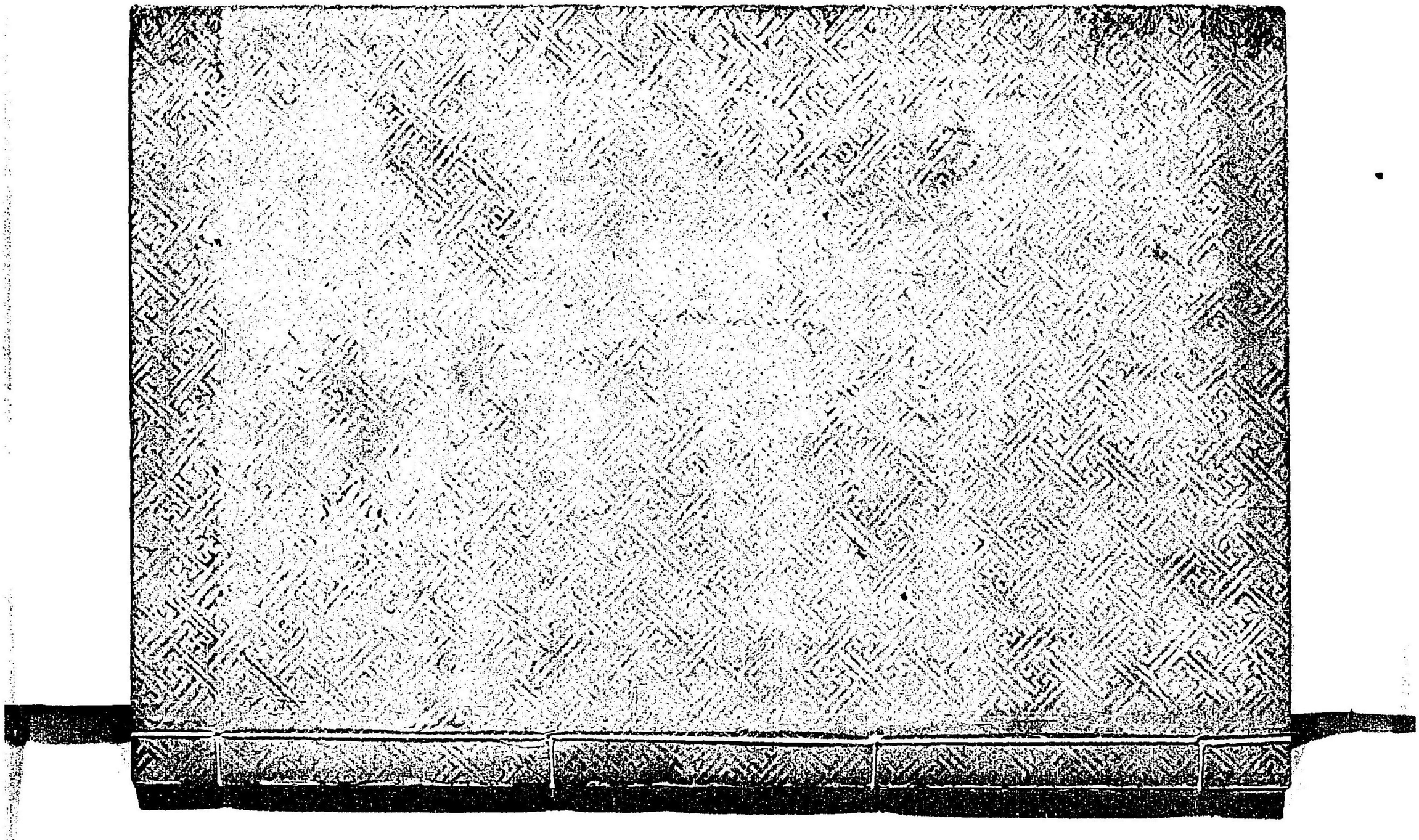
紀元千二百十五年佛王（ヒリップ）とリップアオギュスチュスの子路易（ローイス）又アルビゲンス人を征伐し六週日の間ランゲドックを

亂妨せしがモントホルトを自ら平定しあるし地と亂妨せしめざると見て大に憂ひ路易に勸めて早く兵を引擧げしめざる時にモントホルトの領せし地をトーロース・ナルボン子の二城と以て都とふせしぞ二城を即ちランゲドックの堅城なり

紀元千二百十八年ライモンド即ち以前のトーロース入矣竊に又トトホルトを之と聞てトーロースに攻め寄せしが城中より殺げる石に中て死しにより軍を罷めしして連年ライモンド等アルビケンス人と教公方の兵と合戰しあるが千二百二十二年にあるとライモンド病死せし頃よりアルビゲンス方を勢ひ大に衰へしのぞライモンドの子ライモンド第七遂に盡く領地を佛王に獻じ其部分を佛王より受納めて其諸侯となるに至りぬ時に紀元千二百二十九年なり

佛郎西カペット朝諸王即位の表

帝王の名	紀元
ヒューカペット	九百八十七年
ロベルト第二（ルサージン）	九百九十六年
顕理第一	千零三十一年
ヒリップ第一	千零六十年
路易第六（ルグロー）	千百零八年

路易第七（ゼョング）	千百三十七年
ヒリップ第二（アオギュスチュス）	千百八十年
路易第八（クールドリオン）	千二百二十三年
路易第九（即ち聖路易）	千二百二十六年
ヒリップ第三（ゼハルヂー）	千二百七十年
ヒリップ第四（ゼヘール）	千二百八十五年
路易第十（ヒューナン）	千三百十四年
ジョン	千三百十六年
ヒリップ第五	千三百十六年
査理第四（ゼハンドソーム）	千三百二十二年

西洋易知録巻之四上畢